

あゆみ通信

VOL. 178

あゆみの会(真宗大谷
派大阪教区第2組同朋
の会推進員連絡協議会)
会長 細川 克彦
広報 本持 喜康

第2組同朋大会 にご参加を



去年は、真宗大谷派あげ
ての宗祖親鸞聖人ご生誕8
50年・立教開宗800年慶
讃法要が真宗本廟で行わ
れ、第2組からも団体参拝
をすることが出来ました。
ご参加いただいた皆さん、
ありがとうございます。

さて、毎年3月に開催の



同朋大会は、
2024年
最初の
第2組
あげて
の仏事
です。

第2組では、住職や寺族、
門徒や推進員が共に学ぶ
と言うことを大きな柱と
して、継続して欠かさぬ
ものがあります。それは、
同朋大会と聞法会と報恩
講です。そして、歴代の
ご住職方による組内会と
門徒会によって、長年に
わたり受け継がれてきま
した。

その同朋大会も今年で

39回目となりました。

難波別院へのご参詣と
併せてぜひ、ご参加くだ
さい。

なお体調不安な方は、無
理をされませぬようにお
願いします。

第39回第2組同朋大会

日時2024年3月2日(土) 14:00

(受付時間は13:30から)

会場 難波別院同朋会館講堂

内容 お勤めと法話

講師 武宮信勝先生

(天満別院輪番)

講題「生きてよし、

死して悔いなし

参加費 1000円

(記念品有)



第1回例会ご案内

2024年あゆみの会第1回例会を
次の通り開催させていただきます。
会員の皆さんのご参加
をお待ちしています。体調不
安の方はご無理されませぬよ
うに。(別途、ご案内します)

日時 3月23日(土) 13:30

会場 光照寺(天王寺区上汐)

講師 上場直裕先生

(大阪教区駐在教導・第5組圓
徳寺)

その他 2024年年会費を、当
日受付させていただきます。

紙上法話

あゆみの会総会

藤井善隆先生法話要旨

(前略)

「歩む」

と言うこ

とはどう

いうこと

か。いろ

いろ、も

う嫌だな、

辞めようかなと、

思われることもあることかと。

しかし、たゆまず私たちを歩

ませてくださる。それは一人

では駄目です。こうしてお仲

間と一緒に、共に誘い合いなが

ら、力づけ合いながら、歩

んでいくことが一つ大事なこ

とだと思います。継続してい

く上では、独りではダメです

ね。それと、我々の中に促し

続ける、何か、我々を押し出

す大きな力が実は働いておる

のです。ただ、こういう聞法



親鸞のことば

「聞く」とは、
「信じる」こと。

きくというのは、本願を
ききてうたがうところ
なきを「聞」と言うなり。
一念多念文意

日常の中で、音楽を聞いたり、
人の話を聞いたりしますが、こ
こでの「聞く」は、阿弥陀さま
が私たちによびかける声なき声
を聞いて、疑う心のないことを
いいます。阿弥陀さまは苦悩す
る私たちを悲しんで、「浄土へ
生まれようと思いなさい。この
私にまかせなさい」と、よびか
けています。その呼び声を疑い
なく信じることを「きく」とい
うのです。

(名古屋別院監修「人生を照らす親鸞の
言葉」より)

物忌みをしない

まず、今ある日常の、当たり前
の生活がいかに有り難く、おかげ
さまであることかを痛感する元日
に大災害や大事故が起きました。
極寒の時期に被災された多くの皆
様に謹んでお見舞い申し上げます。

(1月15日時点)

さて、真宗の宗の一つに「物忌
みをしない」があります。

自分も、ほんのこの間まで、神社
でおみくじを引いたり、親譲りで
大安や仏滅と言う日の善し悪しを
考えたり、TVで、星占いを気にし
たり。仏法の教えを聞いてからも、
何かの時にふと気にしたりしてし
まうことがあります。

ところで、2月と言うと、節分で
すね。当たり前のように、「鬼は
外、福は内」と、豆をまいていま
した。真宗の宗に①お念仏、②聞
法、③物忌みをしないとあります。
物忌みについて蓮如さんは、『御
文』で、「物忌みということは、
我流には仏法について物いまわぬ
ということなり」と。外へ追い出
された鬼は、自分の家さえ出たら、
隣の家や他人のところへ行っても
ええことに。何と、身勝手なこと
を言っていたのかと思い知らされ
ることでした。(本)

と言う場で確認していく。

聞法と言うのは、始めは生活の中で聞法をする。生活があつて、その中でちょいちょいと聞法の機会があれば誘われて、聞法の座においでくださる。それが大事なきっかけなのですが。しかし、その聞法を深めていくと、今度は聞法の中で生活をする。立場が転換されてくる。

私があつて、私の生活があつて、



日常生活があつて、その中で、時々暇があつたら

お寺へ足を運んで、聞法する。これも大事ですが。でも、その中心は、私の生活です。どういう生活になっているか。そう言うことが聞法を通して、教えを聞くことによって照らされてくると言うか、問われてくると言うか、どこか、何か引っかかってくるものがあるのです。自分の生活を振り返って「これでええののか」と言うものが必ず起こります。毎日の生活を通して、生活の中で法を聞けるようになる。これが大事なんです。聞法の中で生活をする。あるいは人生を歩んでいく。そう言うことがはっきりしませんと、聞法すると言うことが「面倒くさい」「しんどい」「止めておこう」となる。一生懸命に聞法して下さっている、何かその時だけ、ちょっとお寺に行つて、仏法の話聞いて、「まあ、ちょっと、よかったかなあ」「ああ、なるほどなあ」と思うけれど、元の生活とは全然関係ない。そして、そのうちに、ああ、そうか、仏教の教えはそう言うものや」「分かった」と、3年ぐらいいしたら、そういう人が出て来て、そうしたら、何か、面倒になってきて、怠けてそして卒業です。なかなか、聞法の中で生活することは難しい。そこには聞法していくと、必ず落ち込む落とし穴がある。

「**懈怠界**」です。(中略)

「**懈**」は、懈怠。怠けると言うこと。「しんどいなあ、もう、ええわ」と。「**慢**」は、驕慢とか慢心。驕慢とは「分かった」と思いあがること。慢心は、「私はもう、い

ただきました」と、思いあがること。怠け、思いあがる。こういう世界に、我々ははまり込むのです。お寺に来るときは、「南無阿弥陀仏」とお念仏をして、いかにも信心をさせてもらっていますと。中身はどうか。(中略)

「**本師源信和尚は、懷感禪師の釈により、処胎経をひらきてぞ 懈慢界をばあらはせる**」(「高僧和讃」聖典497P)『菩薩処胎経』に書か

れている中国の懷感禪師のご指導を得て、源信僧都は懈怠界と言うことが私の問題だと分かった。そこには、お浄土へ行く途中で素晴らしい世界がある。その世界に到着すると楽しいことばかりで、快樂の世界(快樂安穩)。そこに住んでいる住人が目を向けた世界は、七宝に飾られた床が展開し、宝物で満ち満ちた世界で素晴らしい。だから、結構だと言ってそこに座り込んでしまう。でも、結構のようだけれども、それは廣大無辺のお浄土のほんの一部分で、それがすべてだと思ひ込んで、全体の大きな世界に目が開かない。そこへ座り込んで怠けてそれ以上進もうとしない。500歳までの長い時間、そこへ座り込む世界だと、親鸞聖人は書かれている。自分は分かったつもり、でも全体から見たら非常に寒々とした世界です。自己満足の世界です。自分の心さえ、安心したり、喜んだり、落ち着きましたと言って喜んで、自分の道を求める聞法の歩みを私物化している。懈怠界ですね。(中略) 退転と言ひまして、歩みをストップしてしまう、仏道を歩むと言う歩みが無くなるのです。あゆみの会は不退転の会ですね。壁が出来たら何処までもご縁になって聞法に間いかけ、深まっていくのです。「我々はへその緒を切ってもらったとたんに、わしが生まれた」という病氣にかかったんだ」とおっしゃった先生がいます。このわしがと言う人生を、私が生まれて、私が一生努力して、いろんな目にあって、私が死んで逝くと。私から始まって、私で終わるのです。そう言うのが「無明」。自分のことが分かっていないし、因縁の道理によって、私がと思う前に、無量・無限の因と縁の条件の相互関係によって物



事が生起する。すべてが因縁のはたらきなのに、その

条件の総合関係の中であらゆるものが存在している。それが真実の道理です。(中略) これを善導大師は、水の河(瞋憎)、火の河(貪愛)、我々の毎日の生活の私の心の内面を、仏さまの智慧、因縁の道理、仏さまの光で照らされて「ああ、なるほど。こう成っていたなあ」と譬えて教えてくださった。『二河の譬え』(中略)

「**汝一心に正念して直ちに來たれ、我、能く汝を護らん**」と言ういのちの声が聞こえてくるのです。後ろからは「ただ道をたずねて行きなさい。ただ念仏して弥陀に助けられていきなさい」と。親鸞さんもここで三定死(止まるも死、行くも死、帰るも死)に立った時に、法然さんの教えを通して、阿弥陀さまの声を聞かれたのです。そうすると私のこの身を支え生かしておった阿弥陀のはたらき、阿弥陀と言うのは量ることの出来ない無量なるいのち、無量なる光(仏智)私を気付かせてくださるはたらき、これを如来と言ひます。無量なる『如』がここへ来てくださる。私の存在そのものが無量寿の現れ。いのちなのです。私の存在そのものが、無量なるいのちから賜って、今を生きておってくださる。無量寿とは願、命の根源的な願いなのです。私たちはその願に遇いたい。出世の本懐。仏さまから言えば本願。生まれたことを、生きることがを本当に有難いなあ、お蔭さまやなあ、素晴らしいなあと喜べるいのち。無量寿とは。(中略)

聞法すると言うことは、こういう私を底へ底へと掘り下げて、聞いていくこと。聞かないと出遇えませんよ。自分の正体が分かったら、そのまま出てくるのが信心です。目覚めた心、領いた心、出遇った心です。南無阿弥陀仏と。それを他力廻向の信心と。